

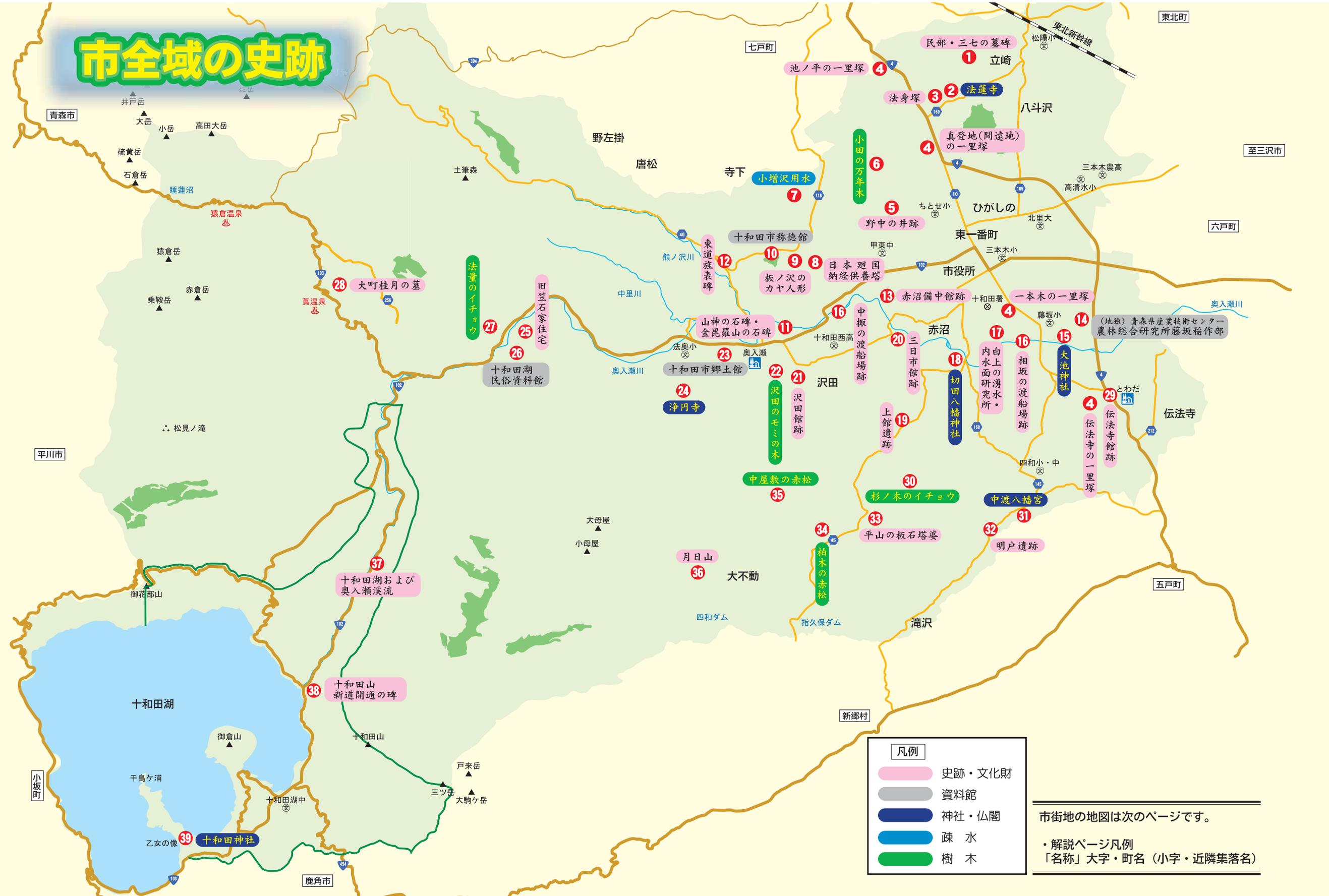
# 十和田市 史跡・文化財マップ



国指定天然記念物  
法量のイチョウ

十和田市教育委員会

# 市全域の史跡



凡例	
<span style="background-color: #f8d7da; border: 1px solid #c6c8ca; border-radius: 5px; display: inline-block; width: 15px; height: 10px;"></span>	史跡・文化財
<span style="background-color: #d6d8db; border: 1px solid #c6c8ca; border-radius: 5px; display: inline-block; width: 15px; height: 10px;"></span>	資料館
<span style="background-color: #d1ecf1; border: 1px solid #c6c8ca; border-radius: 5px; display: inline-block; width: 15px; height: 10px;"></span>	神社・仏閣
<span style="background-color: #d1ecf1; border: 1px solid #c6c8ca; border-radius: 5px; display: inline-block; width: 15px; height: 10px;"></span>	疎水
<span style="background-color: #d4edda; border: 1px solid #c6c8ca; border-radius: 5px; display: inline-block; width: 15px; height: 10px;"></span>	樹木

市街地の地図は次のページです。

・解説ページ凡例  
「名称」大字・町名（小字・近隣集落名）

# 市街地の史跡

凡例	
<span style="background-color: #FFDAB9; border: 1px solid black; padding: 2px;"> </span>	史跡・文化財
<span style="background-color: #D3D3D3; border: 1px solid black; padding: 2px;"> </span>	資料館
<span style="background-color: #ADD8E6; border: 1px solid black; padding: 2px;"> </span>	神社・仏閣
<span style="background-color: #00B0F0; border: 1px solid black; padding: 2px;"> </span>	疎水
<span style="background-color: #00FF00; border: 1px solid black; padding: 2px;"> </span>	樹木



# 市全域の史跡・文化財

## ① 民部・三七（みんぶ・さんしち）の墓碑 大沢田（大沢田）



宮本家の敷地内にある墓碑。延享2年（1745）大沢田村の百姓48人が、南部藩直轄地から立崎氏の知行所とされ、年貢が重くなったため、元の直轄地への変更を訴え一揆を起こした。その責めを負い、打ち首獄門となった首謀者三七と民部を弔ったものと伝えられる。

墓碑には文化3年（1806）とあり、一揆から62年目に建てられたものである。

## ② 法蓮寺（ほうれんじ） 洞内（洞内）



鎌倉時代の名僧法心和尚（臨済宗）の開山と伝えられるが一時衰退し、後に野辺地の常光寺（曹洞宗）の末寺として再興された。

旧本尊とされる伽羅聖観音菩薩像や、法心と弟子の道無が向き合って互いの姿を彫ったと言われている法心和尚像・道無和尚像がある。これら3体の像は昭和40年（1965）に市の有形文化財に指定されている。

法蓮寺境内はかつての「洞内城跡」にあり、堀跡等が現存している。

## ③ 法心塚（ほっしんづか） 洞内（沼田野）



常陸国（茨城県）出身で法蓮寺を開山したと言われる鎌倉時代の名僧法心（法身）和尚を始めとする歴代住職の墓所と伝えられている。集落の北西約500mほどの小高い林の中に卵塔が建てられている。法心和尚の卵塔は2基あり、「開山法心諸大和尚 応仁2年（1468）10月12日（写真左）」、「法身性西大和尚（写真右）」と刻まれたものが並んでいる。昭和40年（1965）に市の有形文化財に指定されている。



## ④ 一里塚（四力所）



一里塚とは、慶長9年（1604）に江戸幕府が旅人の道しるべとして、江戸日本橋を起点に主要街道の一里（約4km）ごとに整備したもので、道路の両脇に二基一対で築くのが一般的である。各種駄賃の目安などになった。

市内では奥州街道沿いの池ノ平、真登地（間遠地）、一本木、伝法寺に残されている。このうち二基一対の状態で残されている池ノ平、伝法寺の一里塚が昭和36年（1961）に県の史跡に、一本木の一里塚が昭和55年（1980）に市の有形文化財に指定されている。

## ⑤ 野中の井跡（のなかのいあと） 深持（南平）



かつてこの一帯は水が湧いていた所である。現在は、耕地整備などによって往時の痕跡は残っていないが、この辺りは広大な原野で、牛馬の放牧に利用されたり、近郊の集落の草刈り場でもあった。人々はこの湧水によって作業の疲れをいやしたと言われている。野中の井は、古絵図や古い文書の中にしばしば表れており、当時の集落間の境界を決める重要な基点の一つでもあった。

奥瀬領・諸村境絵図

## ⑥ 小田の万年木（こだのまんねんぼく） 深持（小田）



砂土路川（さどろがわ）上流部の岸辺の壁面から無数に突き出ている埋れ木（うもれぎ）のこと。今から約1万3千年前に、十和田火山の噴火により噴出した火砕流により埋没し、その後水没したためか、大部分は生木の状態で残っている。

全国的にもこれほど多くの埋れ木が見られることは珍しい。樹種はアカエゾマツなどで、当時の環境が現在よりも寒冷で乾燥した気候であったことが推察される。

## ⑦ 小増沢用水（こますざわようすい） 深持



熊ノ沢川の支流小増沢川から取水して、途中穴堰を掘り、見通しの悪い斜面を掘削し、深持を通り板ノ沢に至る全長約12kmの用水堰である。文政9年（1826）、新渡戸親子による稲生川の完成に先立つこと33年前に完成している。

この事業の特筆されることは、藩や御給人、大商人等による当時の一般的な開拓ではなく、資金・資材・労力・測量など全て深持・中板ノ沢・板ノ沢の村人達によって遂行されたことである。

秋葉神社に記念碑があり、八人の代表者のほかに「三ヶ村惣百姓」と刻まれている。



### ⑧ 日本廻国納経供養塔 (にほんかいこくのうきょうこうとう) 深持 (板ノ沢)

香川県の薬王寺の修行僧であった大空は、全国行脚の末に板ノ沢で晩年を過ごした。この供養塔は、大空が文政13年(1830)に、集落の代表である肝煎(きもいり)治左衛門と老名(おとな)巳之助等の協力を得て建てたものである。

昭和50年代に、道路沿いにあるこの供養塔の笠石の下から、3冊の納経帳が発見された。納経帳には、大空が両親の供養のために約10年の歳月をかけて本州の236カ所の神社仏閣を巡り歩いた記録が残されていた。

平成26年(2014)に供養塔と納経帳が市の有形文化財に指定されている。



### ⑨ 板ノ沢のカヤ人形 深持 (板ノ沢)

毎年7月の海の日に、集落全体でつくる男女一対の大きな人形と、各戸でつくる小さな人形を御瀧大龍神の前に立てている。大きな人形には村の安全と豊作などを願い、小さな人形には女性の出産の無事を祈る。同様の行事はかつて梅集落など十和田市の各地でも行われていたが、現在は板ノ沢で行われるだけになった。「板ノ沢のカヤ人形作り」は平成26年(2014)に市の無形文化財に指定されている。

なお、御瀧大龍神境内には、天明の飢饉で亡くなった人々を供養した餓死者供養塔などの石塔もある。



### ⑩ 十和田市称徳館 (しょうとくかん) 深持 (高森山)

馬の歴史・文化を後世に伝えることを目的として、平成12年(2000)に開館した馬の文化資料館である。

盛岡市にあった私設博物館「称徳館」の収集品を中心に展示するほか、旧軍馬補充部関連資料や十和田市周辺で収集された馬に関する民俗資料などが展示されている。

- ・開館時間 9:00~16:30 (最終入館16:00)
- ・休館日 月曜日(月曜日が祝日の場合はその翌日)、年末年始(12月29日~1月3日)
- ・入館料 一般 300円、高校・大学生 100円、中学生以下 無料
- ・問い合わせ 電話 0176-26-2100



### ⑪ 山神 (やまのかみ) の石碑・金毘羅山の石碑 三本木 (倉出)

山神の石碑は稲生川掘削工事中の安政3年(1856)に、上水工事に関わっていた技術者集団によって建てられた。碑面には、特異な字体で「山神」と彫られており、その下には吉助以下17名の工事技術者の名がある。

金毘羅山の石碑は、十次郎による第2次上水工事中の慶応3年(1867)に、工事の安全を願って建てられたもので、山神の石碑の隣にある。

稲生川掘削工事は、山を掘削して隧道を造り、そこへ川の水を引き込むという山と川の双方に関わる工事であることから、その安全を祈って二つの神を祀る石碑をそれぞれ建てたものと思われる。ともに平成2年(1990)に市の有形文化財に指定されている。



### ⑫ 東道旌表碑 (とうどうせいひょうひ) 深持 (柏)

明治35年(1902)1月に、弘前歩兵第31連隊(37名)が行った雪中行軍訓練の際に、地元から選抜され八甲田山の道案内を行った7名の功績を称えて、地元青年団により昭和6年(1931)に建てられた石碑である。

銘文の「東道」とは案内者を指し、「旌表」とは表彰を意味する。

この時前後して青森歩兵第5連隊(210名)も同様の訓練を行ったが、死者199名を出す大惨事となった。



### ⑬ 赤沼備中館跡 (あかぬまびうちゅうたてあと) 赤沼 (赤沼)

寺上遺跡の西方台地上にある館跡である。古くから三戸南部氏24代晴政に仕えた赤沼備中の居館と伝えられ、古絵図にも描かれている。西側は奥入瀬川に面した天然の要害で、土塁の一部は現在でも見ることができる。

備中は厩別当として赤沼の地を統治していたが、奥瀬氏との確執と城主への恨みから本三戸城に放火し討たれたと言われている。平成13年(2001)の発掘調査の結果、中世の館跡にともなう土塁、堀、建物跡などの遺構が検出された。銭貨、陶磁器等の遺物も出土している。



冷害研究資料館

⑭

(地独) 青森県産業技術センター  
農林総合研究所藤坂稲作部

相坂(相坂)

昭和10年(1935)に冷害・凶作防止を目的に、冷水地帯であったこの地に青森県農事試験場藤坂試験地として開設された。昭和24年(1949)に当試験場で、田中稔が中心となって品種改良された稲「藤坂5号」は、耐冷かつ早生多収稔な品種として、当時の青森県及び東北地方の安定的な米づくりに大きく貢献し、現在県内で栽培されている品種の親となった。

旧庁舎を利用した「冷害研究資料館」には、品種改良や冷害対策研究の歴史、当時の研究器具などが展示されている。(見学には事前に申し込みが必要 問い合わせ 電話 0176-23-2165)



⑮ 大池(おおいけ)神社

相坂(相坂)

もとは大池大明神と称し、現在地より東の方にあったが、一説によると水田耕作が盛んになって集落が西の方に移動したため今の地に遷座したと言う。境内には推定樹齢400年のイチヨウの大樹があることから、それ以前に遷座されたと推定される。

五穀豊穰、商売繁盛、家内安全、交通安全を御神徳とし、農耕神から生活安定の神に至るまで、地域全体の生活上の心のよりどころになっている。



相坂の渡船場『陸奥紀行』より

⑯ 渡船場(とせんば)跡(二カ所)

昔、奥入瀬川には橋がなく、人々は浅瀬を歩いて川越していた。渡船場ができ、相坂～藤島及び中振～太田川原間で渡し舟を利用できるようになったのは、江戸時代になってからと言われていた。

これらの渡船場については往時の旅人が残した記録がある。それらによると、どちらの渡船場も兩岸にサンキ(3本の杭の上部を縛り、下部を土中に埋めたもの)を打ち、それに張った綱を船頭が手繰りながら舟を進める方法であった。奥入瀬川には、ほかにも数カ所に渡船場があったと伝えられている。

明治時代に入り、交通網の整備により順次架橋され、渡船場はその役割を終えたが、奥入瀬川の洪水で橋が流失した時は一時的に復活したという。



屋内飼育実験棟

⑰ 白上の湧水(しろうえのゆうすい)・内水面研究所

相坂(白上)

白上の湧水は、三本木台地が奥入瀬川に下る斜面のところどころにある湧水の一つである。内水面研究所は、白上の豊富な湧水を利用して明治34年(1901)に青森県水産試験場相坂鮭鱒人工孵化場として開設された。

奥入瀬川のヤナ場で獲った鮭の種苗生産や放流技術の研究開発を行い、青森県の鮭漁獲量を全国有数に高めた。また、十三湖や小川原湖のシジミの資源管理、十和田湖のヒメマス資源対策などの調査研究も行い、成果を上げている。

湧水のほとりに建つ稲荷神社には、八郎太郎が十和田湖から投げたと伝えられる巨岩が祀られている。



⑱ 切田八幡(きりだはちまん)神社

切田(下切田)

切田地区の産土神社である。由緒縁起等は、慶応3年(1867)切田大火の時に一切の文献記録を焼失し詳細を知ることはできない。

現在の社殿は、昭和35年(1960)の建立で、本殿・幣殿・祝詞殿・神楽殿・拝殿からなっており、本殿の屋上には、全国的にも珍しい檜状の祠を設けているのが特徴である。

同神社には青森県を代表する南部切田神楽が伝承されている。



⑲ 上館(かみだて)遺跡(切田館跡)

切田(上館)

南部家13代守行に仕え、「鬼弾正」の異名をとる気田弾正の居館と伝えられる。三ツ又川とその支流に挟まれた上館集落を含む舌状台地上にあり、廓の東西に中土壘をとまなう二重の空堀の一部が残っている。

市内の館跡では、三日市館跡と並んで最大規模のものである。

平成22年(2010)の発掘調査で、堀、溝跡の他に平安時代の集落跡が検出され、土師器や陶器、青磁器、鉄・銅製品などが出土している。

**⑳ 三日市館跡** (みっかいちたてあと) 沢田 (三日市)



三日市集落の東端にある館跡である。天正19年(1591)の九戸政実の乱で九戸側についた三日市越中(越前)の居館とされ、市内最大規模の館跡である。  
館跡は三つから四つの廓で構成されたといわれるが、九戸の乱で敗者となった三日市氏にまつわる文献資料は乏しく、後に土地が開発されたこともあり、全容は明らかでない。現在も館跡の一部が残るほか、周辺には一字一石経塚がある。

**㉑ 沢田館跡** (さわだたてあと) 沢田 (館)



奥入瀬川南方約1.8kmの丘陵の東端にある館で、三戸南部氏家臣の沢田氏の居館と伝えられている。寛永4年(1627)に沢田助三郎定兼が盛岡城勤番を命じられ沢田を去った後は、定兼の姉の子である目時八兵衛正宗が住者となり、代々目時氏に継承されている。  
保存状態は良好であり、館の東、西、北の三方に設けられた中土壁をとまなう二重の空堀などの遺構が現在も残されている。

**㉒ 沢田のモミの木** 沢田 (水尻山)



樹高25m、幹周り4.7m、樹齢は不明である。  
この樹は、天正年間(1573~1593)にこの土地を治めていた、沢田氏の居館であると思われる沢田館跡北方の小高い所に立っている。根元には祠が設けられていることから、沢田館との関係が推測される。  
昭和47年(1972)に県の天然記念物に指定されている。

**㉓ 十和田市郷土館** 奥瀬 (中平)



昭和47年(1972)、旧軍馬補充部三本木支部の建物を改修し開館した。その後移転を経て、平成24年(2012)、現在地に移転した。  
市内から出土した土器や石器のほか、市内の旧家に伝わる中世から近世にかけての兜や刀剣、古文書、旧軍馬補充部三本木支部で使用された馬具や日誌、市内で用いられた民具など、多数の資料が収蔵、展示されている。

- ・開館時間 9:00~17:00
- ・休館日 月曜日、年末年始(12月29日~1月3日)
- ・入館料 無料
- ・問い合わせ 電話 0176-72-2340

Ⓜ 囲炉裏の周りの民具

**㉔ 浄円寺** (じょうえんじ) 奥瀬 (中道)



南部地方に数少ない臨済宗の古刹である。天正10年(1582)、領主奥瀬氏が開基した。境内には奥瀬氏の歴代の墓碑がある。  
南部家の菩提寺聖寿寺の末寺であったが、明治24年(1891)に大本山妙心寺の直末に編入された。  
現在の本堂は大正4年(1915)に改築されたもので、山門は後に十和田湖御倉半島から切り出したケヤキで造られている。

Ⓜ 山門

**㉕ 旧笠石家住宅** (きゅうかさいしけいじゅうたく) 奥瀬 (栃久保)




江戸時代後期、18世紀後半の建築と推定される、この地方の農家の典型的な住宅で、母屋の形は直屋(すこや)、屋根は茅葺きの寄棟造り、間取りは広間型の平面となっている。各部屋は板敷で、天井を設けず、礎石に直接柱を立てるなど、古い要素を各所にとどめており、建物全体の約3分の1を占める広い「まや」も特徴的である。  
昭和48年(1973)に国の重要文化財に指定されている。昭和51年(1976)に建築当初の姿に復元され、公開されている。

Ⓜ 囲炉裏と火棚



囲炉裏と生活用品

### ⑳ 十和田湖民俗資料館

奥瀬（栃久保）

昭和53年（1978）、旧笠石家住宅に隣接し開館した。この地方の内水面漁業で用いられた大型のヤスなどの漁用具の他、林業で用いられた大鋸、農機具、衣服などの民具が展示されている。

- ・開館時間 4～10月 9:00～16:30 11～3月 9:00～16:00
- ・休館日 火曜日（祝日の場合はその翌日）、年末年始（12月29日～1月3日）
- ・入館料 市民は無料、一般・大学生 102円、小・中・高校生 51円
- ・問い合わせ 電話 0176-74-2547



### ㉑ 法量のイチョウ

法量（淵沢）

樹高33m、幹周り14.5m、枝張り（南北）27m、推定樹齢1100年の雄のイチョウである。この地は、伝説によると善正寺跡と言われ、南祖坊がこのイチョウを手植えたと言われている。

毎年黄葉する前に初雪の季節を迎え、緑を残したまま落葉してしまい、日本一気難しいイチョウと写真愛好家たちを嘆かせる。

大正15年（1926）に国の天然記念物に指定されている。



### ㉒ 大町桂月（おおまちけいげつ）の墓

奥瀬（鳶温泉）

高知県出身の大町桂月は明治から大正にかけて活躍した作家で、終生酒と旅を愛し、酒仙とも山水開眼の士とも称された。

全国を旅した桂月は、十和田湖と奥入瀬渓流を特に愛し、紀行文を雑誌に寄せるなどしてその魅力を全国に広めた。

晩年は鳶温泉に居住し、大正14年（1925）ここで没した。



### ㉓ 伝法寺館跡（でんぼうじたてあと）

伝法寺（上传法寺）

南部家の家臣津村氏の居館と伝えられる。天正19年（1591）九戸政実の乱の際、九戸側の七戸家国に急襲されたが、時の館主津村傳右衛門の知略により撃退したと言われている。館跡は伝法寺集落南端の舌状丘陵を二重堀で区切った東館と西館の二郭構造からなる。

平成8年（1996）の発掘調査により堀跡や建物跡の遺構が検出され、陶磁器や兜などの金属製品が出土している。

なお、後藤川と奥入瀬川の合流点近くに、津村氏が館主を兼ねていたと言われる支城「羽立館跡」があるが、開田により大方は失われている。



### ㉔ 杉ノ木のイチョウ

大不動（杉ノ木）

樹高約30m、幹周りは根元で約12m、推定樹齢500年の八幡宮の御神木である。幹から垂れ下がった気根（通称ちち）が外観に特徴を与えており、乳の出ない母親達の信仰を集めた。

昭和55年（1980）に市の天然記念物に指定されている。



### ㉕ 中渡（なかわたり）八幡宮

滝沢（中渡）

建久2年（1191）に南部三郎光行が糠部五郡の領主として入部した際に、対馬（津嶋）平次郎景満に命じて甲斐の南部郷より氏神の八幡宮を移させたと言われている。

貞応元年（1222）にそれを八戸の櫛引に移した。これが南部氏総鎮守一之宮櫛引八幡宮であり、中渡八幡宮は滝ノ沢本宮八幡宮と呼ばれた。



### ㉖ 明戸（あけど）遺跡

滝沢（高屋）

集落の西方、後藤川とその支流に挟まれた舌状台地に立地する縄文時代早期～晩期（約1万年～2300年前）の遺跡である。

昭和58年（1983）の発掘調査では、前期～中期の集落跡、晩期の墓域等が検出されている。晩期の成果が特に注目され、墓跡から屈葬状態の人骨が見つかったほか、調査区内から土器、石器、骨角器、翡翠の勾玉等、多量の遺物が出土しており出色である。出土品は市の郷土館に展示されている。

③③ 平山の板石塔婆 (たいらやまのいたいしとうば) 大不動(平山)



板石塔婆とは一般に板碑とも言われ、中世独自の供養塔で、県内では津軽地方で多く見られるが、県南地方ではこの板碑を含め3例のみである。碑面には梵字で阿弥陀三尊(キリク=阿弥陀如来(図中央)、サク=勢至菩薩(図右)、サ=観世音菩薩(図左))を表し、その下位に正平13年(1358)の年号(南朝年号)と2種の偈文(げもん=仏・菩薩を称えた語句)を刻んでいる。平成2年(1990)に市の有形文化財に指定されている。



③④ 柏木の赤松 大不動(柏木)



天満宮参道の入口に立っている樹高35m、推定樹齢300年の老松である。元は左右一対で、鳥居の代わりに植えられたものと推定されていたが、平成25年(2013)に東側の一本が枯死した。昭和56年(1981)に市の天然記念物に指定されている。



③⑤ 中屋敷の赤松 切田(中屋敷)



樹高約10m、幹周り約3.6m、推定樹齢は400年の老松である。中屋敷集落は冬に豪雪に見舞われることから、集落民の道しるべとして植樹されたと伝えられている。昭和51年(1976)に市の保存樹木に指定されている。

③⑥ 月日山 (つきひやま) 米田(月日山)



十和田市の南西に位置する標高約550mの山。ふもとの村々からは霊山として信仰を集め、死者の霊はいったんここに集まってから恐山に向かうと信じられていた。山頂付近には「日月山」と刻まれた磨崖碑や、日月神社などの史跡がある。また、江戸時代に、この山を越えて十和田湖畔(銚子大滝)へ到達する山道があり、三戸、五戸、八戸などの人々が十和田神社へ参詣したと伝えられている。

③⑦ 十和田湖および奥入瀬溪流 (おいらせけいりゅう)



十和田湖は、奥羽山脈の北端に位置する二重陥没火口湖(カルデラ湖)で、植生豊かな湖辺一帯の山岳と共に、形状、色彩にきわだった美しさを見せている。奥入瀬溪流は、子ノロから焼山近くまでの約14kmの溪流で、両側をつらねる岩壁、太古を思わせる樹林、数多くの滝、苔むす岩等により、自然が造形した美の極致と称されている。

昭和3年(1928)、国の名勝及び天然記念物に指定され、昭和27年(1952)に国の特別名勝及び天然記念物に追加指定されている。また、県知事武田千代三郎、法奥沢村長の小笠原耕一、大町桂月らの尽力もあり、昭和11年(1936)に八甲田山一帯を含めて十和田国立公園に指定され、さらに昭和31年(1956)には八幡平などを含め、十和田八幡平国立公園に指定されている。



③⑧ 十和田山新道開通の碑 奥瀬(子ノロ)



碑は国道102号、十和田湖畔子ノロの子ノロ橋交差点東側にある。この碑には、「十和田山新道は、十和田熊野権現神社(現十和田神社)の別当左馬丞の願いを受け、五戸郷藩吏木村又助秀晴が藩に頼みを立て、南部藩主重信の厳命によって、元禄6年(1693)に子ノロまで開設(改修)された」と記されている。

③⑨ 十和田神社 奥瀬(休屋)



江戸時代に十和田信仰(水神信仰)の中心地として龍神を祀り、「十和田山青龍大権現」と称した。また「十和田熊野権現神社」とも呼ばれていた。かつては本殿の左側に熊野三社権現神の社殿があったが、現在は右側に熊野権現の祠がある。古くから修験者の修行場として知られ、南部藩の霊場として発展してきた。一方、当地域の人々は「十和田様」と呼び、険しい山道や深い峡谷を越えて神社に参詣し、また神社の背後の湖面にある占い場に行き、吉凶を占った。社殿は、ヒバの白木造りで、彫刻が細かく施されているのが特徴である。

## 市街地の史跡・文化財



### ④① 土手山のケヤキ

三本木（北平）

樹高26m、幹周り5m、推定樹齢300年の大樹である。  
松前藩の藩主が参勤交代の際に植えた「お手植えのケヤキ」と言われている木で、県の環境指標植物に指定されている。傍らに土手山神社がある。  
なお、土手山の地名は、奥州街道の通行人を風雪から守るためと、放牧した牛馬の散逸を防ぐために造られた土手がこの付近にあったことに由来している。



### ④② 大清水（おおしみず）神社

三本木（北平）

稲生橋の北方約700mにある神社である。昔ここには清水が湧き、かつての荒涼とした三本木原にあっては、オアシス的な場所であったと言われている。  
神社はこの清水を祀って建てられたものと思われるが創建年代ははっきりしない。  
また、昔、この清水のほとりには、根から3つに分かれた（一説には、3本の木とも）タモの木があり、「三本木」の地名の由来になったと言われている。



### ④③ 稲生川（いなおいがわ）

三本木原を灌漑する用水路。安政2年（1855）に南部盛岡藩士新渡戸傳・十次郎父子らが、三本木原開拓を目的に掘削を開始した。法量で奥入瀬川から取水して、中里川・熊ノ沢川に合流させつつ、2本の穴堰（トンネル）を通し、安政6年（1859）5月三本木原への上水に成功した。

その後、明治17年（1884）設立の三本木共立開墾会社により再び整備が進み、明治42年（1909）には太平洋まで通水するに至った。さらに昭和13年（1938）には水野陳好らの努力もあり、国営の開墾事業が着手され、稲生川を改良し、更に新用水路を開削した。これらを合流させて水量を確保し、昭和41年（1966）に完成した。



### ④④ 三本木原開拓渋沢農場文庫

東二十一番町

十和田市名誉市民の水野陳好が建てた資料館。現在、研究者のみに公開している。  
明治17年（1884）に設立された三本木共立開墾会社や、実業家渋沢栄一が明治23年（1890）に開設した渋沢農場関連資料など、明治から昭和にかけての三本木原開拓を知る貴重な資料が所蔵されている。

明治期の三本木原を描いた「三本木原実測図」が、平成11年（1999）に市の有形文化財に指定されている。



### ④⑤ 三本木稲荷神社

稲生町

新渡戸傳・十次郎父子が、稲生川通水後の慶応元年（1865）に新しい町づくりの一環として、元町の千歳森稲荷神社を現在地に遷座したものである。

境内の鳥居の前にある右の狛狐は玉を、左の狛狐は鍵を口にくわえている。  
この地はかつて蒼前林と呼ばれ、清水が湧いていたところで、境内には駒形神社や大池神社もある。

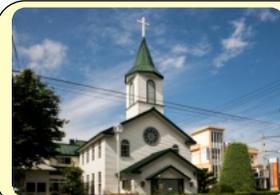


### ④⑥ 理念寺（りねんじ）

西一番町

浄土真宗大谷派の寺。新渡戸傳が三本木原の開拓の際、東本願寺から資金援助を受けたことにより、その志を受け当地に東本願寺懸所を設置した。その後、慶応元年（1865）に鹿角郡白根村の廃寺であった理念寺を同地に移築した。

境内には開拓に関わった人々の墓がある。



### ④⑦ カトリック十和田教会

稲生町

昭和7年（1932）に、スイス人設計家マックス・ヒンデルによって建てられた木造2階建ての教会。正面の切妻屋根に鐘塔を戴き、外壁下見板張にアーチ窓を配したロマネスク様式の建物で、市街のランドマークとなる清楚な建築である。

ヒンデルの設計による教会は、この他に函館のトラピスチヌ修道院などがある。  
平成27年（2015）に国の登録有形文化財に登録されている。



### ④⑦ 太素塚 (たいそづか)

東三番町

三本木原開拓の祖・南部盛岡藩士新渡戸傳の墓所。傳は生前にこの地を自分の墓所を選び、慶応2年(1866)大阪で購入した摂州御影石に、自らの号「太素」と刻ませ墓碑とし、周辺に植樹を行ない整備した。  
明治4年(1871)にこの場所に埋葬され、後に長男・十次郎、孫・稲造の分葬による墓が周囲に建てられた。



### ④⑧ 澄月寺 (ちょうげつじ)

西三番町

曹洞宗の寺。稲生川通水後の都市計画の一環として、新渡戸傳と盛岡報恩寺の25世心月が慶応2年(1866)に建立した。太素塚とは旧国道4号をはさんで東西に対峙している。  
境内には当地に移住してきた旧会津藩の人たちが、戊辰戦争で戦死した会津藩士を供養するため明治23年(1890)に建てた招魂碑がある。



### ④⑨ 官庁街通り

十和田市のメインストリート。「駒街道」とも言われている。  
戦前、この通りを中心として、旧陸軍軍馬補充部三本木支部があったが、戦後廃止され、跡地は官庁街として整備された。広い車道が東西に約1kmにわたって真直ぐに延び、歩道には松・桜が植えられ、馬の彫刻などの野外芸術作品が配置されており、ひときわ美しく整備されている。  
昭和61年(1986)に「日本の道百選」に選ばれている。



### ⑤⑩ 軍馬補充部跡 (ぐんばほじゅうぶあと)

西十二番町

軍馬補充部跡の碑

戦地に馬を補充するため、明治18年(1885)に旧陸軍軍馬局出張所(後に陸軍軍馬補充部三本木支部と改称)が開設された。その規模は本州の支部の中で最大であり、本厩のほか、切田分厩、赤沼分厩、元村分厩が置かれ、また、戸来出張所、中山出張所(一戸町)、七戸派出所なども置かれていた。昭和19年(1944)まで軍馬供給のための購買、育成、補充、調査などが行われ、各分厩などの周辺に広大な採草地、放牧場、飼料畑が広がっていた。  
軍馬補充部の賃金が高額であったこと、競り市での軍馬の購入価格が格段に高かったことなどにより、三本木地方に与えた経済効果は多大なものであった。また戦後、この広大な土地が払い下げられ、農業、商工業が飛躍的に発展し、現在の十和田市の基礎作りに大きな貢献をした。



### ⑤⑪ 新山 (しんざん) 神社

赤沼(赤沼)

赤沼集落北側の小高い丘にある神社で、創建は明応年間(1492~1501)とも、慶長13年(1608)とも言われる。霊夢のお告げで金縁鏡の鑄造本体(弥陀、薬師、観音)を祀ったのが始まりとされるが、祭神は「新山権現」と呼び習わされ、江戸時代の中期から後期にかけて修験道場として栄えた。  
別当職は、大正院、不動院を名乗る高安家(後の沼岡家)が代々継承してきた。昭和43年(1968)に「新山神社の記録及び修験道の古記録類」が市有形文化財に指定されている。



### ⑤⑫ 寺上 (てらうえ) 遺跡

赤沼(赤沼)

縄文時代早期~前期(約1万年~5000年前)の遺跡で、新山神社の西側一帯が範囲である。昭和41年(1966)の調査を始めとして数回の調査が行われ、市内最古の土器(貝殻沈線文土器・早期)が出土したほか、前期後半の集落の一部が検出されている。出土資料は市の郷土館で展示されている。



### ⑤⑬ 大光寺堰 (だいこうじぜき)

奥入瀬川の水を向切田で取水し、相坂、六日町、折茂(六戸町)を經由して、新敷(おいらせ町)に至る全長約17kmの用水堰である。  
五戸の御給人藤田源内・時治親子が開削した。着工時期は諸説あり、嘉永6年(1853)から安政3年(1856)の間と言われており、慶応4年(1868)に一応の完成をみた。新渡戸親子の三本木原開拓のための水路の開削事業とほぼ並行して行なわれた同様の事業として注目される。なお、「大光寺」という名称は、藤田家が財政破綻したため、途中から藩命によりこの事業の御新田係となった大光寺悦衛門の名に由来している。

# 伝統芸能

## なんぶこまおどり 南部駒踊

馬産地として知られた当地方を代表する民俗芸能のひとつである。



駒踊 (洞内)

はち  
つ。撥にも飾が施されている。そのほかに手平鉦二人、横笛二人で構成されている。

藩政時代、馬の育成は専ら野馬放牧によっていた。牡馬2歳の秋、これを取押さえるため、いわゆる「野取(のとり)」を行った。駒踊はこの「野取」の様子を舞踊化したものと伝えられ、現在の形を整えるに至ったのは元禄年間か享保年間のことと言われる。

駒は全部で10頭で、木の枠に木彫の首と尻毛を取りつけた簡素なものである。踊り手が駒の枠型に入り、あたかも人が馬に騎乗しているかのような姿で踊る。騎手のうち青毛、鹿毛、葦毛の一頭がそれぞれ幣束を持ち、これを役駒と言う。

太鼓は二人で、房がついた巴模様の大太鼓を胸にかけて打

市内には保存会が6団体あり、大きく分けると、放牧した野馬を捕らえる「野取」を舞踊化したというもの(洞内・立崎)と、出陣から戦場における軍馬の活躍、凱旋を再現したというもの(米田・滝沢・相坂・上館)がある。

演目はほぼ共通しているが、各団体によって多少の違いがあり、付舞にもそれぞれ特徴がある。

### ・洞内南部駒踊保存会

自然放牧された馬を捕獲する南部藩の木崎野牧における「野取」の様子を舞踊化したものと言われており、素朴な形式そのままに伝承されている。

### ・南部駒踊米田保存会

約350年前に米田の八幡宮が建立された時に始められたと伝えられている。以降、明治から平成にかけて、中断することなく続けられている。行軍や騎馬戦などの戦場における軍馬の活躍を舞踊化したものと言われている。

### ・南部駒踊滝沢保存会

建久2年(1191)に南部光行の命を受けた対馬(津嶋)平次郎景満が、甲斐から南部氏の氏神である八幡宮を中渡に遷座した報奨として、光行より川原毛馬鞍を授けられたことを契機に、八幡宮の行事として始められたと伝えられている。

### ・南部駒踊立崎保存会

享保9年(1724)に立崎村が南部藩の御野馬御用場所となったことを契機に、自然放牧された馬を捕獲する当時の「野取」の様子を舞踊化したものと言われている。

拍子と踊りを一節ごとに区切る点が特徴であり、古い形態を残している。

### ・南部駒踊南部若駒会(相坂)

約260年前の江戸時代中期に始まったと伝えられている。明治以降の中断を経て、昭和4年(1929)に米田駒踊を師匠にして復活を果たしている。

出陣から行軍、騎馬戦、凱旋の様子といった軍馬の活躍を舞踊化したものと言われている。

### ・南部駒踊上館保存会

慶応3年(1867)に上館で馬の伝染病が蔓延した際に、隣村の万内駒踊組を招き、氏神の馬頭観音に平癒の祈願をしたところ、流行が収まったことに感謝して始められたと言われている。昭和37年(1962)に一時中断したが、昭和44年(1969)に女性たちが女駒踊を興し、昭和47年(1972)に本来の男性による芸能として復活した。



セツ棒 (米田)



駒踊 (滝沢)



駒踊 (立崎)



セツ舞 (相坂)



駒踊 (上館)

## かぐら 神楽

神楽は各地区の産土神社などの信仰に付随して伝えられている民俗芸能である。

### ・南部切田神楽会

切田八幡神社の信仰に付随して伝えられている芸能で、代々下切田集落の長男に口伝で伝承されてきた。多くの演目が伝承されており、狂言や謡の中に土地特有のなまりを残している。

中でも、五頭の獅子舞による権現舞は、他に類を見ない勇壮華麗な舞として知られている。

権現舞（切田）



権現舞（藤島）



### ・藤島獅子舞保存会

集落の佐々木家が屋敷内に祀っていた金毘羅権現の信仰に付随して伝えられた。佐々木家は、貞享3年（1686）に藤島に定着し、代々村の要職を担ってきた。

明治維新前後に一時中断したが、明治17年（1884）に伝法寺神楽の指導により復活した。

### ・南部洞内神楽保存会

鎌倉時代に洞内を拓いた洞内由之進が屋敷内に創始したと伝えられ、以来、豊良八幡宮の信仰に付随して伝えられている芸能である。

約200年前に、現在の岩手県一戸町小鳥谷より招いた松之助を師匠として伝授されたものと言われている。

### ・晴山獅子舞保存会

桂水大明神社の信仰に付随して伝えられている。明治初頭に洞内神楽から伝授されたが、大正から昭和初頭まで一時中断した後、昭和22年（1947）に三本木神楽の伝授を受け復活した。現在は八戸の法霊神楽の指導を受けている。

### ・南部深持神楽保存会

深持御仙洞山八幡宮の信仰に付随して伝えられている芸能で、昭和初頭に洞内神楽から伝承を受けている。再三の中断を経たものの、洞内神楽と寸分変わらぬ技芸を復活させている。

虎ノ口（洞内）



とりまい  
鶏舞（晴山）



傘舞（深持）



沢田



## けいまい 鶏舞

鶏舞は、お盆の期間に墓地で先祖供養、精霊供養のために踊られる念仏踊りの一種で、「けんばい」、「けんまい」とも言われる民俗芸能である。

悪霊退散の供養踊りが始まりで、鎮魂の霊力があるとされる鶏をかたどった烏帽子をかぶることから、鶏の文字を当てるようになったと言われている。

ツユギとよぶ祖霊を迎える招代よりしろを中心に、囃方は、笛、太鼓、手平鉦の拍子で歌をうたい、兜を被った太夫と、鶏烏帽子をつけた踊手が円陣をつくって踊る。

六日町



・**沢田鶏舞保存会** 江戸時代末期に五戸町切谷内からおいらせ町下田本村に伝えられたものが、明治20年代に沢田の水尻住民に伝えられたもの。伝承当初は水尻けんばい（剣舞）と言われていた。

・**六日町鶏舞保存会** 江戸時代に伝承されたと言われている。何度か中断を経た後、昭和49年（1974）に新郷村戸来の金ヶ沢鶏舞の指導を受けて復活し、現在に至っている。墓地などで先祖の霊を慰める精霊供養の念仏踊りである。

・**大不動鶏舞保存会** 江戸時代に大不動の不動明王神社の信仰に付随し伝承されたものと言われている。何度か中断を経た後、昭和62年（1987）に婦人会の尽力により復活を果たした。この鶏舞は、念仏舞踊ではなく、五穀豊穡、無病息災を祈願する芸能として伝承されている。

大不動



# 十和田市の指定文化財

## 1 国指定文化財

種別	名称	所在地	指定年月日
・重要文化財（建造物）	旧笠石家住宅	奥瀬字栃久保	昭和48年 2月23日
・特別名勝及び天然記念物	十和田湖および奥入瀬溪流	十和田市・秋田県小坂町	昭和27年 3月29日
・天然記念物	法量のイチヨウ	法量字銀杏木	大正15年10月20日

## 2 国選択文化財（記録作成等の措置を講ずべき無形の民俗文化財）

名称	所在地	選択年月日	保護団体
・南部駒踊	洞内字沼田野	昭和49年12月 4日	洞内南部駒踊保存会
・南部切田神楽	切田字下切田	平成16年 2月 6日	南部切田神楽会

## 3 国登録文化財

種別	名称	所在地	登録年月日
・登録有形文化財（建造物）	カトリック十和田教会	稲生町	平成27年 8月 4日

## 4 県指定文化財

種別	名称	所在地	指定年月日
・県無形民俗文化財	南部切田神楽	切田字下切田	昭和31年 5月14日
・県無形民俗文化財	南部駒踊	洞内字沼田野	昭和34年10月 6日
・県史跡	一里塚（一対二基）	伝法寺字平窪	昭和36年10月 6日
・県史跡	一里塚（一対二基）	大沢田字池ノ平	昭和36年10月 6日
・県天然記念物	モミの木	沢田字水尻山	昭和47年12月 6日

## 5 市指定文化財

### ・有形文化財

種別	名称	所在地	指定年月日
彫刻	法心和尚像	洞内字前田	昭和40年 3月30日
彫刻	道無和尚像	洞内字前田	昭和40年 3月30日
彫刻	伽羅聖観世音菩薩像	洞内字前田	昭和40年 3月30日
史跡	法心塚	洞内字沼田野	昭和40年 3月30日
古文書	新山神社の記録及び修験道の古記録類	赤沼字下平	昭和43年 4月 3日
史跡	一里塚	相坂字白上	昭和55年 1月31日
古文書	新渡戸記念館収蔵品及び新渡戸家文書	東三番町	昭和56年 4月24日
史跡	板石塔婆	大不動字柏木	平成 2年 8月23日
古文書	六十六部日本廻国巡礼納経札	伝法寺字平窪	平成 2年 8月23日
史跡	山神の石碑	三本木字倉出	平成 2年 8月23日
史跡	金毘羅山の石碑	三本木字倉出	平成 2年 8月23日
絵図	寛文三本木村絵図	元町西一丁目	平成10年 6月19日
歴史資料	三本木原実測図	東二十一番町	平成11年 8月23日
史跡	日本廻国納経供養塔	深持字柳原	平成26年11月28日
古文書	廻国奉納経帳	奥瀬字中平	平成26年11月28日

## ・無形文化財

種別	名称	所在地	指定年月日	保護団体
民俗芸能	南部駒踊	米田字向町	昭和40年10月 8日	南部駒踊米田保存会
民俗芸能	南部駒踊	滝沢字館	昭和40年10月 8日	南部駒踊滝沢保存会
民俗芸能	南部駒踊	立崎字立崎	昭和40年10月 8日	南部駒踊立崎保存会
民俗芸能	藤島獅子舞	藤島字藤島	昭和46年12月13日	藤島獅子舞保存会
民俗芸能	南部駒踊	相坂字小林	昭和46年12月13日	南部駒踊南部若駒会
民俗芸能	南部洞内神楽	洞内字沼田野	昭和55年 1月31日	南部洞内神楽保存会
民俗芸能	沢田鶏舞	沢田	平成 5年 7月 5日	沢田鶏舞保存会
民俗芸能	三日市神楽	沢田字三日市	平成 5年 7月 5日	三日市神楽保存会
民俗芸能	六日町鶏舞	相坂字六日町	平成 7年 3月22日	六日町鶏舞保存会
民俗芸能	南部駒踊	切田字上館	平成 7年 3月22日	南部駒踊上館保存会
民俗芸能	晴山獅子舞	深持	平成16年10月19日	晴山獅子舞保存会
民俗芸能	南部深持神楽	深持	平成16年10月19日	南部深持神楽保存会
民俗芸能	大不動鶏舞	大不動	平成16年10月19日	大不動鶏舞保存会
風俗慣習	板ノ沢のカヤ人形作り	深持	平成26年11月28日	板ノ沢町内会

## ・天然記念物

種別	名称	所在地	指定年月日
天然記念物	いちょう	大不動字八幡	昭和55年 1月31日
天然記念物	赤松	大不動字柏木	昭和56年 4月24日

## 十和田市 史跡・文化財マップ

平成28年6月 発行

発行 十和田市教育委員会  
編集 十和田市教育委員会  
十和田市文化財保護協会

印刷 社会福祉法人至誠会  
誠幸園印刷指導所



国登録有形文化財  
カトリック十和田教会



教会内部

市指定無形文化財  
板ノ沢の力ヤ人形作り

